

個展「Somehow the mosaic looks nice」のコンセプト

僕はこれまで特定の場でしか成立しないものを多く作ってきましたが、今回はギャラリーという場で成立するものを作りたいと思いました。そして現在、「箱庭」をテーマにしたインスタレーションを中心に展示を構成しようと考えています。このアイディアの着想のきっかけは、ギャラリーや美術館で作品をインストールする作業が箱庭遊びのようだと思っていたことにあります。

箱庭遊びとは、小さな箱の中に人形や景観を構成するオブジェを用いて一つの景観を作る遊びです。また、遊戯療法として、患者の非言語的表現を読み取るためや、自己治癒力を高めるために行なわれています。もし、作品のインストールが箱庭療法的であると、治療者は鑑賞者にあたりますが、美術を鑑賞するという前提がある場合、作家と鑑賞者の立場は逆転するでしょう。しかし、僕は自身の経験から、作家と鑑賞者の関係は一言で言い切れるほど単純ではないと感じます。全体性の象徴を表現する上で、一つの統合性をアウトプットできる作家であっても、天才的でなければいけないのはむしろ鑑賞者であり、無意識の法則を知らなければその人の“箱庭”を理解することができません。また、作家は必ずしも他者に伝える努力をしなくてもよいことから、作品の配置行為は元来箱庭遊び的な性質を強くもっているものと考えていました。

そこで、僕は自身の言語化できない思考や状況を遊び、それぞれの要素が互いに関係するように配列して逆説的に箱庭を作ることを思いつきました。そして、その作業を通して「自分がこれまで言葉にできなかった、もしくは言葉にしてこなかったもの」を探る行為そのものを作品にしようと考えました。この作業は多くの作家が当たり前に行っていることだと思いますが、それを遊びの様に行い、提示することが今回の試みであります。

この展示タイトルは、明らかにしたら面白くないことでも、よく見えないときは面白く見えるよね、という意味です。日本語のモザイクの意味と、モザイク画の二つの意味が重なっています。何かを隠す目的で用いられるモザイクとモザイク画は性質が全く違いますが、単体では意味を持たないピースが集まって記号や寓意、本当の象徴性を形作るといったように、シチュエーションによって意味を変えるとこの点では同じかもしれません。箱庭遊びも同様に、状況の配列次第で見え方は全く変わります。この和訳無しのタイトルは、答えのないパズルのピースでただ無造作に遊んでいるにも関わらず、目を逸らしたくなる状況に遭遇してしまうかもしれないということを認識して鑑賞してもらいたいという思いで選びました。

なかなか上手く説明できませんが、僕自身がよくわからないものはよくわからないものそのままいいと認める、また、鑑賞者が僕の思考の中に迷い込むことができればゴールなのかもしれません。このようなことを考えています。

2015年3月

中野 岳